慶應義塾大学学術情報リポジトリ
Keio Associated Repository of Academic resouces

Title	功利主義の現代的再解釈 : Neo-Utilitarianismの可能性と課題
Sub Title	Contemporary reconstruction of Utilitarianism : potentiality and issues of Neo-Utilitarianism
Author	梅津, 光弘(Umezu, Mitsuhiro)
Publisher	慶應義塾大学出版会
Publication year	2014
Jtitle	三田商学研究 (Mita business review). Vol.56, No.6 (2014. 2) ,p.53- 63
JaLC DOI	
Abstract	功利主義は18世紀にイギリスで生まれた倫理思想であり, 「最大多数の最大幸福」をその規範原理としてきた。本論文ではこの規範倫理学説を現代の視点から再解釈する。まず, 古典的な功利主義の要約とその問題点を跡づけた後, この原則には空間−時間の理論枠の導入が欠けていることを指摘し, さらに現代的な観点から功利計算問題へのビッグデータ技術からの貢献の可能性が論じられる。さらに最大幸福の概念についても, 昨今の幸福研究の成果をふまえた指標化の試みを紹介しながら, 総合的な再定義の可能性と課題が論じられる。
Notes	今口忠政教授退任記念号#論文
Genre	Journal Article
URL	https://koara.lib.keio.ac.jp/xoonips/modules/xoonips/detail.php?koara_id=AN00234698-20140200-0053

慶應義塾大学学術情報リポジトリ(KOARA)に掲載されているコンテンツの著作権は、それぞれの著作者、学会または出版社/発行者に帰属し、その権利は著作権法によって保護されています。引用にあたっては、著作権法を遵守してご利用ください。

The copyrights of content available on the KeiO Associated Repository of Academic resources (KOARA) belong to the respective authors, academic societies, or publishers/issuers, and these rights are protected by the Japanese Copyright Act. When quoting the content, please follow the Japanese copyright act.

三田商学研究
第56巻第６号
2014 年 2 月

2014年１月14日掲載承認

功利主義の現代的再解釈

―― Neo-Utilitarianism の可能性と課題――

梅　津　光　弘

＜要　　約＞

功利主義は18世紀にイギリスで生まれた倫理思想であり，「最大多数の最大幸福」をその規範原理としてきた。本論文ではこの規範倫理学説を現代の視点から再解釈する。まず，古典的な功利主義の要約とその問題点を跡づけた後，この原則には空間―時間の理論枠の導入が欠けていることを指摘し，さらに現代的な観点から功利計算問題へのビッグデータ技術からの貢献の可能性が論じられる。さらに最大幸福の概念についても，昨今の幸福研究の成果をふまえた指標化の試みを紹介しながら，総合的な再定義の可能性と課題が論じられる。

＜キーワード＞

功利主義，功利主義の再解釈，ネオ・ユーティリタリアニズム，ビッグデータ，幸福研究，OECD 幸福度指標

１．はじめに

Van Rensselaer Potter が *Bioethics: Bridge to the Future* を発表したのが1971年であり，生命倫理学の開始を広義の応用倫理学の出発点と考えるなら，応用倫理学も40年以上の歴史を持つことになる。この間，生命倫理，医療倫理，環境倫理，ビジネス倫理などの応用倫理学の諸分野が開花し，最近では技術者倫理や専門職倫理の講座も開設されていることから，日本においても大学や大学院における応用倫理学講座数は急増しているものと思われる[1)]。

通常応用倫理学の講座では，規範倫理学の理論を紹介した後（あるいは紹介しながら），個別具

1）　日本において応用倫理学講座数の統計調査は行われていないため，正確な数字は把握できていない。近年発刊された『応用倫理学事典』執筆者の状況等から類推すると，25％から30％の大学で何らかの応用倫理学講座が存在するものと思われる。企業倫理学関連講座設置数の調査では，2006年慶應義塾大学商学部梅津研究会のシラバス調査で全国463学部中43学部で設置という結果がある。また，国連 PRME のデータによれば2014年３月現在で全世界80カ国530団体の参加があることから，企業倫理，CSR 関連の講座数を推論することはできる。

体的なケースを使って授業を展開していくことになるが，何が応用を意味するのかについては論者によってさまざまな見解がある[2)]。私見によれば，応用倫理学の方法とは規範倫理学の理論的文脈と，各分野における固有な具体的文脈との間を双方向的に行き来しながら，施策なり理論なりを深めていくプロセスであると考えている。その点で，従来の規範倫理学の持つ思弁的，分析的方法のみではなく，具体的な事例の文脈を持っているのが応用倫理学共通の特徴であると言える。

二つの文脈の双方向の交錯とは数学で言えば連立方程式を解くようなものであり，二つの異質な文脈間の相互作用によって学問を進めるやり方は，自然科学の方法を踏襲しながらも人間や人間集団という物理的存在とは本質を異にする対象に接近するための有効な方法であると考える。応用倫理学の方法では，規範倫理学の理論や原理をどのように当てはめると現実のケースが説明できるかを考える方向性と，現実のケースが提起する課題なり問題なりに照らして，従来の規範倫理理論に影響を与える方向性とがある。

これまでの応用倫理学では理論→現実の方向性についてはそれなりの成果をもたらしたと思われるが，現実→理論の方向からの貢献はそれほど行われてこなかったように思われる。理論研究をする学者は，思弁的，文献学的な文脈の中でのみ研究を進め，現実の事例を語ることをしたがらない。応用倫理学者は理論研究者が提出してくる規範倫理研究の成果をそのまま受け入れて活用させてもらってきた。ある意味では，応用倫理学者が理論倫理学に対して発言をすることはタブーであり，応用倫理学は現実からのフィードバックを規範倫理学にもたらすことに消極的であった[3)]。

ところが，ここ数年応用倫理学から規範倫理学へのフィードバックともとれるような一連の研究が現れだした。例えば川本隆史，髙橋久一郎編『応用倫理学の転換』（ナカニシヤ出版，2000年），小林道憲『複雑系社会の倫理学』（ミネルヴァ書房，2000年），中谷常二『ビジネス倫理学』（晃洋書房，2007年），伊勢田哲治『倫理学的に考える』（勁草書房，2012年）等がそれである。特にその中で功利主義の理論的再解釈の研究も進んできている。児玉聡『功利と直感』（勁草書房，2010年）がその代表例である。そこで，この小論では，特に議論が活発化している，功利主義の現代的な再解釈に焦点を当て，その可能性と限界を見極めるための考察を進めていきたい。

2．古典的功利主義の基本構図

まず，古典的な功利主義の基本構図をおさらいしておこう。功利主義は行為や意思決定の帰結がどのような結果をもたらすかに着目し，その状態を評価することによってのみ行為や意思決定の規範倫理学的な判断を行おうとする。これは方法論的な帰結主義である。ジェレミー・ベンサムによれば，自然はそうした帰結を判断するにあたって快・不快という感覚を万人に与え，それ

2）　川本隆史，髙橋久一郎編（2000年）『応用倫理学の転換』ナカニシヤ出版の「Ⅳ　方法と教育への問い」（p.190以下）を参照のこと。応用倫理学という言い方よりも実践倫理学あるいは臨床哲学などの呼称のほうがよいという意見もある。

3）　Ibid., pp.190-191.

によって快の増大＝善，不快の増大＝悪という価値判断の経験的基礎を提供している[4]。功利主義は善悪の快楽説を採用し，この感覚の普遍性を根拠に倫理学説の基礎づけを行おうとしている点で自然主義的基礎づけ主義でもある。

ここまでの教説は後にリバータリアニズムや古典的自由主義に発展する立場，さらには西欧近代の個人主義や倫理的利己主義と呼ばれる立場とも共通であるが，倫理的利己主義が「自己の快の最大化」をもって行動原則とするのに対して，功利主義は「最大多数の最大幸福」をもってその行動原則とする。すなわち帰結における快の増大，不快の低減をめざすことは他の立場と共通であるが，「最大多数の最大幸福」という社会全体の快の最大化をめざす点で，公的な観点が勘案されており倫理的利己主義とは根本的に異なっていると考えられる。

功利主義はベンサムの提唱以降，いくつかの批判と変更を経て現代に至る。そのうち最も大きな変更はジョン・ステュワート・ミルによるものである。ミルはベンサムの「最大多数の最大幸福＝功利性原理」に基本的に同意するものの，ベンサムが幸福の基礎にある快，不快の感覚を数量的に把握し，社会全体における快，幸福の全体量を問題にしたのに対し，幸福の質を問題にする。有名な「満足した豚より，不満足な人間のほうがよい」という命題は身体的な快や幸福のみで満足するより，精神的な快や幸福を質的に高度なものとして把握するミルの教説を端的に言い表したものとされる[5]。ここから現代流に言えば，金額に換算できる物質的な豊かさのみならず，Quality of Life と呼ばれる，目に見えない精神や学術あるいは家族や交友関係など人間的な交流の豊かさなどが「最大多数の最大幸福」の意味に加えられるようになった。ミルは終世「功利主義者」を名乗っていたというが，質的功利主義を唱えた瞬間，実は自らも気がつかないうちに功利主義の一線を踏み越えていたのだとする考え方もある。

功利主義に対する他の批判としては，少数派の権益の問題がある。「最大多数の最大幸福」は多数派にとっては好都合であるし，施策としては最大公約数的な大多数に共通の利益がめざされることになる。その場合，少数者はどう扱われるのか，少なくとも功利性原理の中には少数者に対する配慮は含まれていない。これは特定の個人や集団の便益最大化をめざすのではない公的な便益最大化をめざす功利主義にとっては大きな欠陥であると言われてきた。

さらに質的功利主義では，多数派の幸福をどう判断するのかも問われることになる。いわゆる功利計算問題と呼ばれるもので，質的に異なった快や幸福をどのようにして累積させるのか。あるいは質的に異なる価値のプラスマイナスをどのように相殺し，収支差を決定するというのか。

功利主義は「最大多数の最大幸福」という明快かつ簡便な原則と，快＝善，不快＝悪といったわかりやすい善悪の二分法のゆえに，19世紀から20世紀前半までは経済学をはじめとする社会科学，また行政を中心とする社会政策の立案に至るまでさまざまな社会規範の根幹を担ってきた原則であると言えるが，そのわかりやすいイメージとは裏腹に，複雑かつ重大な問題をその理論の中に抱え込んだまま今日に至っていると見ることができよう。

4）『道徳および立法の諸原理序説』「第１章　功利性の原理について」および「第３章　苦痛と快楽との四つの制裁または源泉について」の項を参照のこと。

5）『J. S. ミル功利主義論集』（京都大学学術出版会，2010年）p.268参照のこと。

3．功利主義の現代的解釈

1）最大多数の対象範囲：功利主義の空間的―時間的枠組み

本節では，先述した功利主義の理論的欠陥を現代的知見をふまえて再解釈するとどのような仕儀になるのかを論じてみたい。まず，「最大化」という言葉を用いるのなら，誰にとっての最大化か，どの範囲の最大化か，またどのタイムスパンでの最大化かが問われなければならない。功利主義は漠然と社会一般を考え，社会一般における功利の最大化を論じ続けてきた。そこには一国の閉じた系の中における最大化が前提とされてきたのである。しかし，21世紀のグローバル社会において，そのような国を単位とした最大多数の最大幸福はあまり意味を持たない。そもそも一国を単位とした経済はすでに，もとより存在しておらず，世界は複雑な相互依存経済を形成している。ここでの最大多数の最大幸福は何を意味するのか。功利主義も21世紀においてはグローバル功利主義という，評価のベースを地球規模に置き換えた対象にしなければならないのではないか。ベンサムにしろミルにしろ，漠然とした一般社会なるイメージを対象にすることで，一気に普遍性の高い原則を見いだそうとしたのは理解できないわけではない。また，ミルは東インド会社に勤めた経験があるから，いくぶんは世界を相手にしたビジネスにも関わっていたが，『功利主義』が書かれた時代は未だに国民国家を中心としたローカルな社会しか眼中になかったとしても不思議ではない。

おそらくベンサムなら，それでも功利性原理の妥当性を主張するであろう。曰く，18～19世紀の時代的制約はあって21世紀のようなグローバル社会は目にしていなかったが，それでも地球規模での倫理規範は功利性原理であることに変わりはない，と。18世紀の功利主義はそれでもよかったであろうが，本稿の課題は21世紀における功利主義の再解釈である。「約70億人に達する人口が生活する，地球という惑星における21世紀初頭のグローバル社会における」「最大多数の最大幸福」という時間―空間限定は必ずつかなければならないと考えられる。

また時間限定については，必ずしも定点としての時刻を示すにとどまるものではない。「最大多数の最大幸福」と言う場合，そこで起こる事象の快・不快計算が行われるわけだが，そこで問題となるのはある一時点における快楽勘定のバランスのみならず，ある一定期間のタイムスパンでの相殺を含んだバランスも当然考えられなければならない。株式会社における企業会計では，中間決算を繰り返しながら，一年を単位とした決算報告が株主総会に提出されるわけだが，「最大多数の最大幸福」という倫理原則もそのようなタイムスパンの中で評価される必要がある。

なによりも重要なのは，時間―空間限定という枠組みを考えない「功利の最大化」はありえないということである。最大という概念は，ある集合を構成する要素が存在する中で，任意の順序尺度に照らすと特定の要素が最高位の順序に位置づけられることを意味する。限定的な要素の定義が確定していなければ，そもそも集合の成立自体がありえない。集合がありえなければ，最大多数も最大幸福も指定できないのは明らかである。したがって「最大多数の最大幸福」を現代的に定義しなおそうとすれば，検討の対象となる社会を限定する枠組みがどうしても必要となる。

空間―時間の座標軸で功利主義をとらえ直すと，図１に示すような，グローバルな幸福量のある時点における分布や，日本あるいは東京といった空間的限定と20XX 年 X 月 X 日といった時間限定をともなった功利主義のあり方が見えてくる。

これまで座標軸を考えないままに功利主義を語ってきたことの弊害は大きい。例えば，他の帰結主義の理論との比較検討もなされずに来てしまったことである。同じ帰結主義のヴァリエーションとして論じられてきた倫理的利己主義の場合，時間―空間限定が著しく狭いタイプの功利主義と考えることができる。すなわちベースになる集合の要素が１であるような場合における最大多数の最大幸福を考えていたと見ることも可能である。この場合要素が１であるから，この要素の幸福最大化が即最大多数の最大幸福になるわけで，倫理的利己主義は功利主義におけるきわめて特殊な単位元であるとの見方もできよう。倫理的利己主義者はタイムスパンのとりかたも非常に短期的なものと考えることができる。目前の自己利益のみを考えるからこそ利己主義はその本領を発揮できるのであり，中長期的なタイムスパンを考えると「情けは他人のためならず」といった諺にもあるように，利己主義者は短期的・表面的には利他主義者のように振る舞っておく必要がある，といった一見すると矛盾した行動をとらなければならなくなる。

功利主義と言えば，経済学や行政学など後年分岐・発展した学問の基礎ともなり，またミル以降はその限りではないものの，ベンサムにおいては明確に数量的な快・不快，幸・不幸の算定を考えていた立場であるのに，なぜいままでその対象範囲の限定条件については考えられてこなかったのか。私見によれば時空限定＝相対主義というプラトン以来の哲学が抱え込んできたイデオロギーの所産ではないかと思われる。功利主義は最も経験論的な，アングロサクソン系の倫理学であり，経済学や経営学などとも親和性を持った規範論であるのに，プラトニズムの呪縛はドーバー海峡を渡って影響力を持ち続けてきたのではないか。現代において功利主義をより説得力のある理論に変革するためにはどうしても限定的で共通の座標軸が必要となる。

空間―時間による座標軸の設定は，最大多数の最大幸福を決定する上で不可欠の条件である。同時にそれは功利主義の弱点と言われてきた少数派の権益を守るための指針にもなると考えられる。すなわち，少数派の空間―時間における特定である。

座標軸を策定して，最大多数の最大幸福を図示しようとすると，その中ではじめて少数派がどこに分布しているかが明確になる。当然対象範囲の空間―時間限定のもとでの判断である。そこでこうした一群の少数者に対する改善策を考えればよいことになる。これまでは少数派の同定すらできていなかったが，少数派の中でも比較的有利な立場にある，あるいは幸福を平均以上に享受している少数派と，まさに不幸な立場に苦しむ少数派が同定されることになる。この不幸な立場に苦しむ少数派こそ，ジョン・ロールズが正義論の中で問題視した格差の源泉であると言える。ここではこれ以上立ち入ることはできないが，長らく功利主義は正義論に対立する立場であるととらえられてきた。ロールズの正義論における格差原理は，功利主義の立場を厳格化することによって乗り越えられる可能性が出てきたと言えよう。

図１　功利主義の空間―時間座標軸

2）最大多数の計算方法：ビッグデータ論者の主張とその規範論的含意

功利主義を空間―時間の枠組みで明示することで限定すると，従来から問題とされてきた少数派の権益の問題や，ロールズの正義論で問題とされた少数弱者への配慮不足といった問題にもそれなりの道筋が見えてきたと言える。ただ功利性原理の中で，最大多数の最大幸福をどのように計算するのかという，いわゆる功利の総和に関する計算問題と呼ばれる難題が残されている。現代的にこの問題に答えようとするとき，現代のIT技術はどのような応答をするであろうか。

近年開発された情報技術は，どれも刮目に価するものばかりであるが，ビッグデータの主張する革命は，単に社会的な有用性が大きいばかりか，その技術があつかう対象の網羅性，全体性，データ量，多様性，検索性，スピードなどの点でこれまでの技術革新とは一線を画するものである。また，グーグル等の企業はすでに多方面でデータの収集を行っており，Facebook等のSNSではユーザーが情報の提供者となっている。それゆえ，一方でビッグデータは些末な情報の「ごみため」であるとする否定論から，インフルエンザ・ウィルスの世界的な感染状況を把握したり，台風の進路や災害の状況をリアルタイムで把握したりといったこれまでにない有用な情報活用が可能であるとった肯定論まで，千差万別な議論が乱立して未だに確定した評価を得ているとは言い難い。

そもそも，ビッグデータとは何を意味するのか。ビッグデータとは，私的公的に集められた調査結果などのデータや，SNS等近年のIT技術で蓄積された膨大なデータの集積をさまざまに活用しようとするものだ。これまでのデータ処理能力では不可能であった処理を可能にするべく新しい巨大容量のツールプラットフォームが開発されている。その特徴は技術的には，データの網羅性にある。また，知識論的にはリアルタイムなデータ収集によって，時々刻々変化する現象をそのままの姿に近い形で把握することができるようになったという点にある。

その影響は科学方法論や知識のあり方の変更にまで及び，哲学的あるいは認識論的な革命やパラダイム・シフトを謳っている。社会哲学や規範倫理学の観点からも看過できない主張が列挙されている。

例えば，Victor Mayer=SchonbergerとKenneth Cukierによれば，ビッグデータでは限りなくすべてのデータを扱うために，無作為抽出のサンプル・データではなく文字通りすべてのデータをリアルタイムで漏れなく処理できるようになる，という[6]。標本抽出やその後の統計的な処理，検定など，これまで求められてきたデータ処理やその正確さは，あまり意味を持たなくなり，網羅的かつ膨大なデータ，しかも時々刻々変化するデータを扱う中で，データ収集に関する厳格な統計的手続きや，データそのものの精度という概念自体があまり意味を持たなくなるという[7]。知識のあり方も，従来の因果関係の解明あるいは因子分析といった観点よりも，事象が生起する確率や緩い相関関係が重視されるようになる。

情報化社会においての脅威は「プライバシー」から「確率」に変化する[8]。ビッグデータの時代

6）『ビッグデータの正体：情報産業が世界のすべてを変える』第2章：第一の変化「すべてのデータを扱う」「N＝全部の世界」を参照のこと。

7） ibid., 第3章：第2の変化「精度は重要ではない」「量は質を凌駕する」を参照のこと。

では個人情報保護と称する規制は防御線としての役割を果たさなくなり，ネット上では情報共有を個人が積極的に行うようになる。そこでは，病気を持っているという個人のプライバシーよりも，病気になる確率のほうがはるかに個人にとっては脅威となる。

このようなビッグデータ論者の論点は，にわかに信じ難い側面もあるものの，その哲学的，倫理学的含意は大きい。まず，ビッグデータ論者の世界観は，世界内存在を固定的，実体的な存在としてとらえる「物的世界観」ではなく，時間軸に沿って絶えず変化するプロセスとしてとらえる「事的世界観」である。これはアルフレッド・ノース・ホワイトヘッドが提唱し，チャールズ・ハーツホーン，ジョン・B・カッブなどが洗練してきたプロセス哲学の流れに属する思想であり，日本においては廣松渉などが主張してきた世界観に近いものとなる。ここではこの話題に深入りすることは避けるが，プロセス哲学では，世界の全体を一つの大きな変化する「場（Concrescence）」としてとらえる。また個々の事物は固定した「物（Being）」ではなく，つねに形を変えていく「こと（Actual Entity = Becoming）」である。さらには個々の事態は他の事態との関係性から互いに他を感じ，その統一感を保つ「抱握（Prehensive Unification）」である。

それではビッグデータによる規範論的な含意は何か？　さまざまな含意が考えられるが，功利主義との関係で述べれば，第一にこれまでにはなかった異次元の倫理的自然主義＝功利計算が可能になるということである。倫理的自然主義とは事実命題の積み重ねが当為命題を導くという考え方であり，「ものの何であるか」という本質判断から「もののどうあるべき」という当為判断が導かれるという立場である。これまでは，限られた事実の集積から当為を導くことの限界が述べられ，当為判断などの価値判断は事実とは異質な判断であるとの立場が規範倫理学では主流であった。もしビッグデータ論者の主張が正しければ，今後人間が手にするデータは限定されたものではなく，人間が世界と関係し，認知し，感じ，評価した全てのデータがリアルタイムで統合されるというのである。ここではもはや世界全体の統計学的推測ではなく，記述データそのものが即世界の認識になるということである。一般に前提となる事実命題の量が多ければ多いほど，帰納的に導きだされる結論は一義的なものになる。これは演繹的な推論においても同様である。莫大な量のデータ＝事実命題の集積からは，これまでとは全く異なった当為の演繹が導きだされる可能性が大きくなる。

第二のポイントは最大多数の最大幸福を，ビッグデータの活用によって，リアルタイムで求めることが可能になる点である。おそらくここでは功利性の計算問題も次元を異にしたより記述的な集計になるのであろう。例えば，全世界の人々がそれぞれの位置でスマートフォンを使って，自分の幸福量を何らかの形で数値化して送信し，それを定期的に集計したとすれば，空間―時間の枠組みの中にリアルタイムの幸福量が集積されることは原理的に可能となる。この場合，全世界というグローバルな最大空間における，最大多数の最大幸福を割り出すこともできるし，日本という地理的な限界におけるそれや，より限定的で狭い空間におけるそれを計算することも可能となる。

8）ibid., 第４章：第３の変化「因果から相関の世界へ」「答えが分かれば、理由はいらない」を参照のこと。

現時点においてビッグデータの規範論的評価は時期尚早の感は免れない。しかし，この技術の持つ可能性は大きく，もしビッグデータ論者が言う n ＝全部の世界が可能になったとすれば，功利計算をこれまでにないレベルに引きあげることは確かであろう。

3）最大幸福の解釈：幸福度に関する新たな知見

これまでは最大多数の最大幸福のうち「最大多数」に関係することについて述べてきた。「最大多数」の計算法と「最大幸福」の同定は表裏一体のものであって本来この二つを分けて論じるわけにはいかないのだが，ここでは便宜的に二つを分けて論じてきた。話を最大幸福概念の検討に進めると，ここ数十年の間に，幸福についての実証研究も多方面で行われるようになった。特にここ数年は Derek Bok, *The Politics of Happiness*（Princeton Univerity Press, 2010）[9]，Jeffrey Sachs, *Common Wealth*（Penguin Books, 2008）[10] など法学や経済学からの幸福論への参入が顕著になってきている。また行政からの取組みとしては，ニコラ・サルコジ前フランス大統領の呼びかけに応じて，ジョセフ・スティグリッツ，アマルティア・セン，ジャン・ポール・フィトゥシが主導した「経済実績と社会進歩の測定に関する委員会（通称スティグリッツ委員会）」の研究がある。この成果は *Mis-measuring our Lives*（The Commision on the Measurement of Economic Performance and Social Progress, 2010）としてまとめられた。[11]

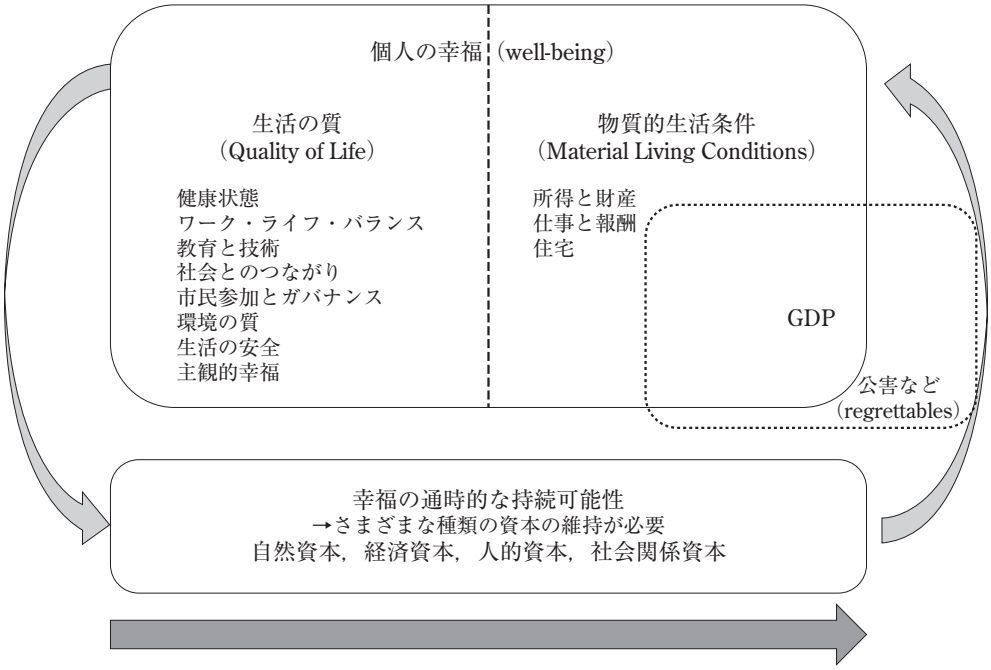
これらの研究はいずれも社会全体の到達目標としての幸福をこれまでの GDP による評価のみではなく，それに多角的な側面からの評価を加えようとする試みである。古典的功利主義の文脈で述べれば，ベンサム流の数量的功利主義だけでなく，ミルの質的功利主義の観点も加えて行われている。しかも実証的かつ多角的な幸福理解が進んできており，まさに現代における最大幸福原理の再解釈の試みに向けて着実な成果をあげつつある。本節では膨大な量の幸福研究の成果を網羅的に扱うことはできないが，代表的なものとして OECD（経済協力開発機構）の Better Life Initiative の見解を中心にまとめておきたい（図２）。私見によれば OECD の成果は，その50年にわたる歴史を反映しているとともに，スティグリッツ委員会の成果など最新の研究成果にも十分な配慮がなされており，しかも論点が最も簡潔によくまとまっていると思われるからである。

OECD は2011年にその創立50周年を記念して，「より良い暮らしイニシアチブ」をスタートさせた。OECD の創立目的である「経済的繁栄の醸成，社会的進歩の促進，人々の幸福の向上」を未来に向けてより正確に把握しようという動機に基づいている。

OECD がこのプロジェクトで達成しようとしたものは，幸福をより良い暮らし（Well-Being）としてとらえ，これを理解し，測定し，評価するための枠組みを設定することである。枠組みの中心となる三つの柱は１）物質的な生活状態，２）生活の質，３）持続可能性であり，現在の幸福と将来世代の幸福とを区別して測定しようとしている。また，指標化された観点を経済状態の総体のみではなく，世帯や個人の幸福としてもとらえている。これは，先述した最大多数の対象

9）邦訳は『幸福の研究：ハーバード元学長が教える幸福な社会』（2011年，東洋経済新報社）。
10）邦訳は『地球全体を幸福にする経済学：過密化する世界とグローバル・ゴール』（2009年，早川書房）。
11）邦訳は『暮らしの質を測る：経済成長率を越える幸福度指標の提案』（2012年，金融財政事情研究会）。

図２　幸福測定の枠組み
OECD: Better Life Initiative



出所：『OECD幸福度白書』 p.26を改変。

範囲を空間的に限定するとともに，国全体の幸福度と世帯や個人の幸福度には乖離があるという立場をとっている。さらに個人の幸福は通時的な持続可能性がなければならず，これを可能にするものがさまざまな資本の維持であるとしている。[12)]

図２で着目しておきたいことは，幸福を客観的要素と主観的要素とに分け，人が自らの生活をどう評価しどう感じているかの情報も主観的幸福として把握しようとしている点である。[13)] 主観的幸福感は心理的なものであって，数量化や指数化がむずかしいとされてきた要素であるが，同時に主観的な感じ方こそが幸福そのものであるとも言える。今回こうした主観的要素が計測の項目に入れられたことで，客観的要素の変動との関係性を見ることも可能となる。

もう一つのポイントは物質的生活状態と生活の質を持続可能性という通時的な観点から検討する枠組みとなっていることである。これも第３章１節でふれたように，時間軸を区切って評価をし，さらにこれが一時的な最大多数の最大幸福ではなく，将来世代の最大幸福を視野に入れた持続可能なものでなければ意味を持たないことが，強く認識されることになった。

ただし，通時的な観点からの指標評価は環境の通時的改善等の一部の要素の分析にとどまっており，今後の改善が課題となっている。

12）『OECD 幸福度白書』（2012年，明石書店）p.25。
13）Ibid., p.26.

4．小結：功利主義の可能性と限界

ここまで，古典的功利主義の現代的再解釈の可能性について，1）最大多数の最大幸福を評価する場合の空間―時間限定の観点，2）功利性原理の計算方法にビッグデータを用いるという観点，3）最大幸福の意味を近年の幸福研究の成果をふまえて再吟味し指標化する観点から考察してきた。

このうち筆者の評価としては，1）の座標軸となる枠組み設定は必須の要件であり，近年の幸福研究などではすでに多くの評価枠組みの中に持続可能性の項目が入れられている。ただし，時間軸に沿った評価の枠組みについては未だ持続可能性概念そのものを含めて，さらなる議論と検討が求められている。

功利計算方法については，ビッグデータの活用が期待されるものの，最大幸福の指標化のプロセスにおいてもこの技術との連携の視点は不足している．その理由はビッグデータの技術がまだ発展途上にあることと，スティグリッツ委員会にしろ OECD にしろ委員会の中にビッグデータのような最新情報技術の専門家がおらず，組織の面からも連携が不十分であることが指摘できる。

幸福研究の成果については，最も充実した成果が出てきており，功利主義を新功利主義として深めていく上でさまざまな示唆を与えるものと思われる。ただし，理論の依拠するディシプリンは多様であり，いくぶん乱立ぎみの幸福解釈をまとめるのは至難の業でもある。ビッグデータ技術のような新技術が状況を打開するきっかけをつくるのではないかと期待はできるものの，幸福の実証研究に限ってみてもネット調査を含めて IT を活用した研究は，私の知る限り OECD のそれが唯一のものである。今後は幸福研究においても学際的研究交流が進むことが望まれている。

参 考 文 献

伊勢田哲治（2012）『倫理学的に考える：倫理学の可能性をさぐる十の論考』勁草書房
OECD 編著（2012）『OECD 幸福度白書：より良い暮らし指標：生活向上と社会進歩の国際比較』徳永優子，来田誠一郎，西村美由起，矢倉美登里訳，明石書店
川本隆史，髙橋久一郎編（2000）『応用倫理学の転換：二正面作戦のためのガイドライン』ナカニシヤ出版
児玉聡（2010）『功利と直感：英米倫理思想史入門』勁草書房
サックス，ジェフリー（2009）『地球全体を幸福にする経済学：過密化する世界とグローバル・ゴール』野中邦子訳，早川書房
スティグリッツ，ジョセフ・E., アマルティア・セン，ジャンポール・フィトゥシ（2012）『暮らしの質を測る：経済成長率を越える幸福度指標の提案』福島清彦訳，金融財政事情研究会
関嘉彦編（1967）『世界の名著 38 ベンサム，J. S. ミル』 中央公論社
田中朋弘，柘植尚則編（2004）『ビジネス倫理学：哲学的アプローチ』ナカニシヤ出版
中谷常二編著（2007）『ビジネス倫理学』晃洋書房
ボック，デレク（2011）『幸福の研究：ハーバード元学長が教える幸福な社会』土屋直樹，茶野努，宮川修子訳，東洋経済新報社
マイヤー＝ションベルガー，ビクター，ケネス・クキエ（2013）『ビッグ・データの正体：情報の産業革命が世界のすべてを変える』（電子版）斉藤栄一郎訳，講談社
ミル，J. S.（2010）『J. S. ミル功利主義論集』川名雄一郎，山本圭一郎訳，京都大学学術出版会